

# ふれあい 支えあう すこやかなまち 住みよい高須 たかす社協だより

第13号(秋・冬編)  
令和2年 12月15日発行  
高須地区社会福祉協議会  
発行責任者 香月 英彦

## コロナ禍にあっても、住み続けたい「たかすのやさいまちづくり」を考える

高須地区社会福祉協議会 会長 香月 英彦

2020年の初頭からパンデミックとなった新型コロナウイルスの猛威が、今また拡大化しています。私たちは、正しく恐れる「Withコロナ」の考えのもとで、日常生活に対応する事が必要です。

高須地区社会福祉協議会では、2025年の超高齢化時代に備えて、「助けて！」と言える地域福祉の実現と、2030年までに達成すべき持続可能な開発目標、SDGsにある【NO.3すべての人に健康と福祉を】、

【NO.11住み続けられるまちづくりを】、  
【NO.17パートナーシップで目標を達成しよう】  
を指標にした展開を進めていきたいと考えています。

具体的には、

- 1, 毎日の高須の良い習慣の継続
- 2, お互いの支え合いのシステム化としての「たかすちょこっと応援タイ」の推進
- 3, 日頃のご近所の交流をサポートする「5サロン・3カフェ」の継続とそれをサポートする産学官との連携によるデジタル化への新しい展開です。

さて、今年2020年は、コロナウイルス感染に対して高須の各団体も大きな行事は中止となりましたが、「高須地区社協」は、ソーシャルディスタンスを確保しながら11月22日に第5回認知症行方不明者捜索模擬訓練を図上に置き換え実施しました。コロナ禍は、こうした「つながりの輪」を見直すチャンスでもあります。そのために今一度、高須の人口実態と社協の対応を再認識し次に備えていかねばと思っています。

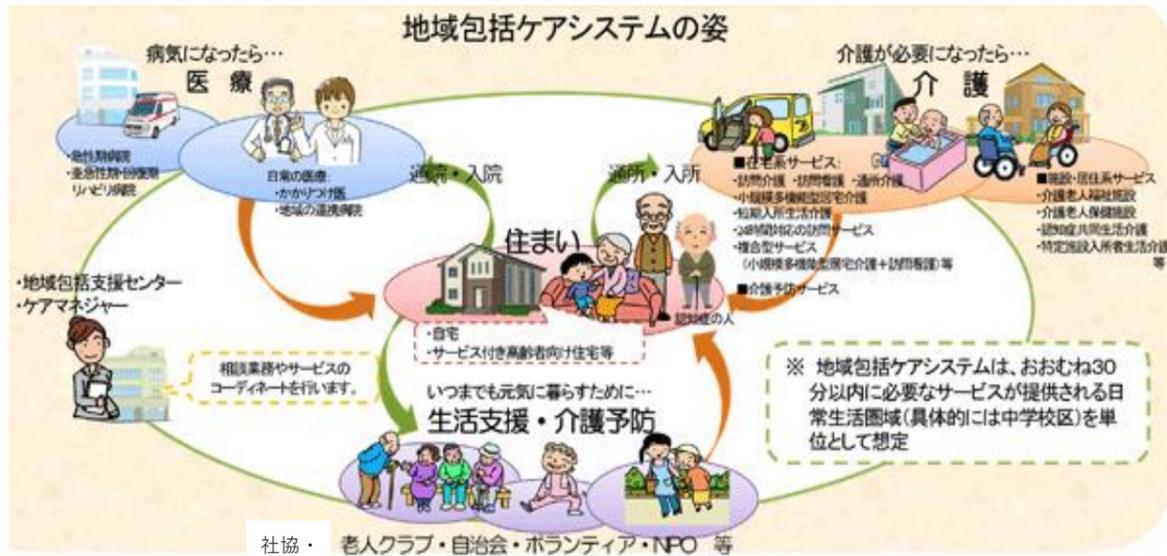


### 高須地域の高齢化率32.1%

令和2年3月31日の北九州市の調査で、高須地区は、人口8,874人・高齢化率32.1%となり(若松区も同じ)、北九州市の平均(人口946,338人・高齢化率30.7%)を上回っています。また、北九州市の人口は昨年と比べ3,847人減、高須地区は、約800人減っています。75歳以上の高齢化率は南4丁目の19.0%に対し、北は52.3%と少子高齢化が顕著です。

### コロナ禍への高須地区社協の対応

1. 新型コロナウイルス常態化への地域対応  
新形コロナへの正しい認識と対応  
新生活様式の地域励行→  
3密防止・マスク着用
2. 地域包括ケア体制づくり・地域共生社会へ
3. 孤立化の防止の地域連携  
一人暮らしなどの増加で孤立化が課題になっています



- 6, セミナー：認知症ご本人の思いとご自身の活動について  
(中村真理子地域活動コーディネーター)

認知症は、自分事：認知症のかたの個性を大切に  
○コロナ禍でも認知症の方も自分の意志で外出して楽しみたい  
○認知症に対する認識の誤りは、周りの思い込みと偏見によることが多い。認知症の方もいろいろな思いがあり行動していることを考えてあげる事が大切。「助けてあげる」私と「助けてもらう」認知症の人でなく自分の事として認識。  
○ビデオ観賞：認知症の方自身が司会をして患者数人の思いを伝えた。  
○認知症対処社会→認知症フレンドリー社会 本人に寄り添い共生社会を運営認知症とともに生きる希望宣言！  
○全国の認知症行方不明者2019年 は17,479人・未確認245人・死亡460人  
○高齢になればだれでもなる認知症・予防は備えのために  
・はじめから重度ではない。

## 第5回たかす認知症行方不明者捜索模擬訓練 Withコロナで参加者を制限し図上認識で実施

コロナ禍の自粛生活で認知症との関係が懸念されるなか、第5回たかす認知症行方不明者捜索模擬訓練を開催しました。概要は以下の通り。  
(司会 山本直子 高須社協副会長)

\*日時 令和2年11月22日(日) 午前9:30~11:30  
\*場所 高須市民センター講堂 \*参加者 42名

- 1, 5回までの訓練の経緯と協力のお礼、今後の展望 (香月英彦 高須地区社協会長)  
2016年の第1回以来、地域と行政での連携をしながら、また年間12回のDr.末吉講座の実施や北九州市立大学や企業も加えた研究学習(たかすりビングラボ)も開設して訓練を続けている。  
今回は、新型コロナウイルス禍で制限されながらもいかにして開催するかを検討し実施した。  
○安全MAPで検証 ○見守りの機能や連絡体制のオンライン化やSDGsとの連動も考えていきたい。○社協では、「見守り活動」や「たすちょこっと応援タイ」が、生活支援する中で認知症情報に注意している。  
ここで、5年間訓練にご参加、ご協力頂いた多くの皆さまに心からお礼申し上げます。

- 2, 年々増加傾向にある行方不明者の捜索の依頼 (川口和彦若松警察署生活安全課長)  
行方不明者の捜索依頼は、年間88件ほどあり15件が行方不明のまま。ご家族からの依頼と通報による捜査があります。近隣バス停で見つかる、タクシーで遠くまで行かれる、側溝や川にはまるなどいろいろなケースがあります。不明になる方の日頃の様子を分析しておいて、小さな輪を大きな輪に！緊急な通報に支援をお願いします。また、認知症の方にはGPS機能付きの携帯保有を推進しています。



- 3, 救急体制に連絡を (濱崎哲也若松消防署予防課予防係長)  
行方不明者対応は、警察ですが、負傷など救急につながるケースの場合☎582-3811へ連絡をお願いします。また、発見時は119へ連絡。火事か救急か、事案の日時・場所・内容・年齢・連絡者など明快をお願いします。緊急の場合口頭指導による応急処置もあります。

- 4, コロナ流行下のメンタルヘルス (末吉信之脳神経外科院長)  
自粛生活が、うつや認知症のきっかけにも?! 正しく恐れましょう!  
「2011東日本大震災」級の新型コロナウイルス禍で不安・恐怖・脅迫的行動が出現。イライラし落ち着かない、家庭内不和、夜眠れない、コロナでは?と不安、薬・アルコール依存など。「自粛生活」を誤解して、家に潜んでうつ病や認知症に変異してしまう。それでも結核が不治の病だった時代に比べると新型コロナウイルス対応は進んでいる。感染症の専門家でもない人の忠告やマスコミのあおりなどに乗らず、正しく知り、恐れましょう。ワクチンへの期待も過大評価せず、規則正しい生活、現在の生活のなかでできること、「園芸」など趣味の生活や人とのつながりを考え、「散歩」「ウォーキング」などの軽く動くことを 見つけ、今できることをしましょう。

- 5, 東西南北4地域別で、図上訓練  
捜索活動の検証~地区別の  
安全MAPで捜索拠点を検討



- 7, 老いを支える家族の会 (中崎新次郎氏)  
認知症の方、家族、知人など一緒につながって考えていきましょう。

- 8, 認知症訓練と勉強会の継続で地域の力を!  
(坂本毅啓北九州大学准教授)  
認知症をテーマに地域の健康について、真剣に取り組まれておられますことに敬意を表します。  
1) 今後の事業運営もいろいろな人と勉強会をしながら意識を高めていく事が大切。  
2) コロナ禍をチャンスにするには、「今立ち止まって次の展開を再考」しましょう。  
3) 自粛生活には、規則正しい生活と自分を生かすことを始めましょう。  
そこで、地域の活動を支援する組織「たかすりビングラボ」も、今回懸案事項のひとつである捜索活動にオンラインを使っての「一斉連絡体制」を実践できるように一緒に考えたいと思います。